

## 「おくのほそ道」と「曾良随行日記」

「おくのほそ道」を読む時に、補助資料として「曾良随行日記」を読むと有益である。松尾芭蕉が記録を残していない部分についても曾良の記録から読み取ることができて、旅の全貌を知るのにはかなり役に立つ。

「曾良随行日記」は「日記本文」・「名勝備忘録」・「俳諧書留」の三つの分冊で構成されている。

「日記本文」はその名の如く日記そのものであるが、「名勝備忘録」は旅先で出遭った事物についての書かれており、読者としては有益な資料である。「俳諧書留」には、旅先で作った俳句が記されており、芭蕉翁・曾良の作以外に、旅のついでに立ち寄った俳諧仲間や出遭った人の作品も記されており、「おくのほそ道」本文を凌ぐ頁数になっている。

「おくのほそ道」と「曾良随行日記」を併記して解説を加えた書籍も数多く出ており、インターネット上でも探せば入手は可能だが、まずは岩波文庫「おくのほそ道 付 曾良随行日記」を自分の目で読んで見ることにした。

「おくのほそ道」の第一頁目は、「冒頭」という表題で始まる。中学校の国語の授業で学んだ記憶がある。

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて……

旅に出ることになった経緯やその後ろにある心持が示されている。そして次の項は「旅立」

彌生も末の七日、明ぼの空朧々として、月は在明にて光おさまれる物から、不二の峯幽にみえて、上野谷中の花の梢又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乗て送る。

千じゅと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ。

行春や鳥啼魚の目に泪

これを矢立の初として行道なをすゝまず。人々は途中に立ちならびて、後かげの見ゆる迄はと見送なるべし。

元禄2年(1689年)3月27日(当時の暦で)が旅の出発日だった。出発前に移り住んだ杉風の別所を起点とみれば、船に乗ったのは仙台堀ではないかと言われている。ここから船に乗って隅田川に出て千住まで行った。これから始まる長旅の出発にあたり、不安半分の心境が描かれている。

「おくのほそ道」の次の項は「草加」になっており、千住大橋から日光街道を歩いたと思われる。

「曾良随行日記」の本文は、こんな書き出しになっている。

巳三月廿日 同出、深川出船。巳下剋 千住に揚る。

廿七日夜 カスカベに泊る。江戸より九里余。

以下日付入りで旅の経過が記されているが、芭蕉が記録を残している地名と曾良が記している地名とが微妙に異なるので、二人の記録を合わせて見ると途中の細かな経路や経由地がわかる。

若生きて帰らばと定めなき頼の末をかけ、其の日漸く早加と云宿にたどり着きにけり。(芭蕉)

廿七日夜 カスカベに泊る。江戸より九里余。(曾良)

廿八日 ママダに泊る。カスカベより九里。前夜より雨降る。(曾良)

廿九日 ママダを出。小山へ一里半……(曾良)

「おくのほそ道」では、草加を出たあとの記述は、「室の八嶋」(現栃木市惣社町)になっているが

「曾良随行日記」本文では、前記のように春日部・間々田・栗橋の関所(利根川の渡し)を通り、小山から飯塚へ、飯塚の里はずれから小倉川を徒歩で渡り、惣社河岸の船着場から川を渡って「室の八嶋」に至ったことが書き記されている。さらに室の八嶋を出た後は、芭蕉の記録では

卅日(みそか)日光山の麓に泊る。あるじの云けるやう、「我名を佛五左衛門といふ。萬正直を旨とする故に、人はかく申侍ま一夜の草の枕も打解けて休み給へ」と云。

日光山の麓まで来たことと、佛五左衛門という人の家に泊ったことはわかるが、その場所がどこなのかはわからない。一方、曾良随行日記では室の八嶋を出た後

すぐに壬生へ出る。この間三里と云へども弍里少余。壬生より楡木へ二里、(半道ほど進んだところから廿間ほど畠中に入った)吉次が塚へ。楡木より鹿沼へ一里半。昼過ぎより曇、同晩鹿沼に泊る。

四月朔日前夜より小雨降。…時々止て折々小雨す。終日雲、午の刻日光へ着。雨止。

と記述があり、どこを通ったのかもわかってくるし、気象の様子も書かれていて、情景がよくわかる。

芭蕉の記録で「日光山の麓」とあるのは今市のことらしい。また、両者の記録上の日付が一日ずれているのは、この年は三月は二十九日までしかなかったが、芭蕉はそれを失念して「三月卅日」と書いていたということもわかった。

日光まで辿り着いた芭蕉は、こんな書き出して日光を語り始める。

卯月朔日、御山に詣拝す。往昔此御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時日光と改給ふ……

あらたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞かゝりて雪いまだ白し。

剃り捨て黒髪山に衣更 曾良

「日光」は二荒山(ふたらさん)が元の名で、のちに「日光(にっこう)」になったことが示された上で、

「あら尊いこと!」という率直で洒脱な表現で一句したためた。次の行には黒髪山(男体山)を読んだ曾良の句が書き記されている。そしてその次の行に

曾良は河合氏にして、惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の労をたすく。このたび松しま象潟の眺共にせん事を悦び、且つは羈旅(きりよ)の難をいたはらんと、旅立暁髪を剃りて墨染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。よって黒髪山の句有。衣更も二字力ありてきこゆ。

曾良の一句を書き記すにあたり、河合曾良という人物を紹介した上で、この一句の背景にあるものを補完説明している。さらに二荒山はその昔「黒髪山」と言われていたことにも触れて、下の句「衣更」が持つ重みを評している。江戸時代に編纂された下野国誌には、「黒髪山は、世俗では男体山とも呼ぶなり」と書き記されている。

新潟を過ぎて日本海を右手に北陸路を西へ西へ。糸魚川を過ぎると左手から少しずつ山が迫って来て、青海を過ぎるともう海と山との境界がわからないような絶壁の難所「親不知」になる。

「おくのほそ道」本文では、「越後路」という表題でこんなことが書いてある。

酒田のなごり日を重て、北陸道の雲に望む。遙々の思ひおねをいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞く、鼠の関をこゆれば越後の地に歩行を改めて、越中の市振に至る。此の間九日 暑湿の労に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡の横たふ天河

旅も日を重ねて心身共に疲労が重なってきている上に、暑さにも痛めつけられて不調な状況に陥っているように感じる文章である。そして、次の「市振」の項になると

今日は親しらず・子しらず・犬もどり・駒返しなど云う北国一の難所を越えてつかれ侍れば、枕引き寄せて寝たるに、一間隔てて面の方に若き女の声二人ばかりときこゆ。年老いたるをのこの声も交じりて物語するをきけば、越後の国新潟と云所の遊女成りし。

難所を越えて蓄積した疲労の状態で、少しゆっくり寝たいなど思っているところへ、お伊勢詣りをしようという遊女の身の上話を聞かされて、いささか困惑気味の様子が書かれており、結びにしたためられている一句が

一家に遊女もねたり萩と月。

「曾良随行日記」本文では

十二日天気快晴、能生を立。早川にて翁つまづかれて衣類濡。川原暫干す。午の尅、糸魚川に着、荒や町、左五左衛門に休む。大聖寺ソセツ師言伝あり。母義、無故に下着、此の地平安の由。

申の中尅、市振に着、宿。

十三日市振を立。虹立。……………

芭蕉の文章には少々旅の疲れも感じられるが、曾良の文章にはあまり表われてはいない。しかし細かく読んで見ると、気象状況から出会った人や物などについてまで記録の勢いは落ちていないが、「名勝備忘録」の方は量的にも質的にも少しずつ減退してきている感じがする。

山中温泉まで来ると、「おくのほそ道」にこんな記述があった。

温泉(いでゆ)に浴す……………

山中や菊はたをらぬ湯の匂

曾良は腹を病みて、伊勢の国長嶋と云所にゆかりあれば、先立ちて行に

行き行きてたふれ伏すとも萩の原 曾良

と書置きたり。行くものの悲しみ、残るもののうらみ隻鳥(せきふ)のわかれて雲にまよふがごとし。

予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

隻鳥(せきふ)とは、「つがいまたは一心同体であったケリ(鳥)が、はぐれて一羽で虚空を彷徨うこと」を意味する言葉で、曾良と別れて一人になる我が身の不安を言い表した表現で、芭蕉の心の内がかうかがえる。

そして一人旅になった芭蕉は、大聖寺の城外にある全昌寺という寺に泊る。先に立った曾良も前夜この寺に泊ったので、ふと思いがめぐったのだろうか

一夜の隔(へだたり)千夜に同じ。吾も秋風を聞て衆寮に臥せば、明けぼのの空近う読経声すむま  
に、鐘板鳴て食堂に入。

といくらか感傷的になっている。

「曾良随行日記」本文には山中で別れてからの足取りが記されており、伊勢長嶋の長禅寺・海蔵寺を経て

九月三日辰の尅立つ。……夕大垣に着。天気吉。

とあり、「おくのほそ道」の「大垣」の項に入ると

露通もこのみなどまでむかひて、みのの国へ伴なふ。駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より来り合、越人も馬をとばせて如行が家に入り集る。其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且悦び且いたはる。

と、空気が一変したことを感じさせる文章になっている。そして、

旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の迂宮(遷宮)おがまんと、又舟にのりて

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

と詠んで終章(「大垣」)の終りになっている。この日の「曾良随行日記」を見ると、

六日 天気吉。辰尅出船。木因・馳走。越人船場迄送る。如行、今一人三里送る。餞別有。申ノ尅、杉江へ着。予 長禅寺へ上て、陸をすぐに大智院へ到。船は弱半時遅し。七左・由軒来て翁に遇す。

九日に船で桑名へ、桑名から歩いて津に着いたところで随行日記は終っている。

約半年にわたる長旅を終えた松尾芭蕉は伊勢神宮に詣でたのち伊賀に帰省。伊賀を拠点として大津・膳所・京都を何度か旅した後で年末に深川に戻った。

元禄7年(1694年)の5月に再び上方への旅に出たが、10月に旅先の大坂の門人宅で他界(51才)。

河合曾良は慶安2年(1649年)に信濃国高島城下の下桑原(現在の諏訪市)で誕生。両親を亡くしたことから伯母に育てられたが再び死別し、伊勢国長嶋の住職深泉良成に引き取られた。成年後に長嶋藩の松平康尚に仕え、ここで俳諧を嗜むようになった。33才で江戸に出て蕉門に入った。宝永6年(1709年)、徳川家宣の命を受けて幕府の巡検使随員となり九州各地を巡ったが、翌年長崎県壱岐で巡検の途上で病没。(62才)

以上

#### ●関連情報・参考資料

室の八嶋探訪の旅

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/oomiwa.pdf>

松尾芭蕉の生涯といくつかの旅

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/basho.pdf>